

中村 桂子 評

アフオーダンスの心理学 生態心理学への道

エドワード・S・リード著 (新曜社・4800円)

自分自身が生きものだからだろう。私たちも生きもの行動とそれがなぜどのようにして起きるのかに関心を持つ。人間をも含めた生きものへのそのような関心が行動学、心理学などの学問を産み出したわけだが、対象が複雑であるだけにスパッと切った切り口はなかなか見えて来ない。

初めて見たものを親と思いその後についていくという印象的な実験例を示した「刷り込み(インプリントィング)」が大流行していると思つたら、いつの間にか大勢は「利己的遺伝子」へと移っていた。遺伝子万能といふ眼で見れば、動物のあらゆる行動は、遺伝子を残すためだけに存在するのであって、個体は遺伝子の支配下にあり、遺伝子のためにあるという話になつてゐる。

著者は、ダーウィンの

の実験を生態心理学の好例としてあげる。ダーウィンは、ミミズが穴の入口を葉であるまで湿氣を保つことを観察した。生態心理学では、これを湿氣を保つための行動とは言わずに、葉のアフオーダンスを利用して湿氣保持につながる行動をしたと考

た。そこへ急に現れたのがアフオーダンスという言葉だ。人間の行動まで、刷り込みで語つていた人が、遺伝子、遺伝子と言いつ始めたと思ったら最近はなんでもアフオーダンス。これは、環境の中である生物にと

生物は自ら発見した環境で運命を作る

つて重要な意味をもつものといふことらしいとまではわかつたが、流行とは少し離れていた。どう気持から、まともな勉強をせずにいた。

ところが、この本(原書)の「世界との出会い——生態心理学への道」という題にひかれて読んでみたら、興味深い視点をもつた学問の誕生がここにあることがわかり、その世界に引き

た。そこへ急に現れたのがアフオーダンスという言葉だ。人間の行動まで、刷り込みで語つていた人が、遺伝子、遺伝子と言いつ始めたと思ったら最近はなんでもアフオーダンス。これは、環境の中である生物にと